

港口深く進み入り

我船沈め歸りこし

初が忠勇の決死隊

九

あゝ勇ましの決死隊

七十七士の忠勇は

わが海軍の花にして

其名薫らむ万代に

青葉集

其の子

▲夏の飲みものは、麥湯こそよけれ、さる家にては  
玄米を煎りて煮たる汁を茶の代はりに用ふと聞  
侍り、

▲早くより子供に博物理科の思想を養はんことと

そ望ましけれ、さりながら、虫類を捕り來りては

ピンにて其脊中を刺し通し〜幾匹も并べて美麗

なる額に仕立て、室内を飾るなどは望ましからぬ

業なり、さるは生ある動物を骨董品と同視するな

り、研究にもわらで、動物を虐待するなり。

大人にもかゝることを娛樂とする人あり。

▲子供を研究することもよき事なり、されど心せ

ざれば、之と同じ過に陥るべし。

▲梅雨のづれ〜なるまゝに、かきふるしたる反

古などを、文庫の中よりより出でたる中に、次の

文句ありけり

あはれに、悲しく聞かるゝは、月いとさえたる

霜夜に、下駄の齒音高くひやかせながら、大路

を流し行く按摩の聲、まだ、明けやらぬ冬の朝

風の、音の絶間を流れて聞ゆる納豆賣る子のか

ん走つたる聲、秋の夕の尺八は、殊にあはれ深し。すさまじきものは、白粉こくつけたる女の、襟くび丈けは、忘れてか其儘に残したる、男のカラーの襦色になりたる、袴もなき和装の貴女の舞踏、さては、女の憤怒りたる顔こそ、いみじくゆゑしきものなれ、男もさらぬにはあらねどこれは猛きが常なるに、女は柔和をもて本性とすればことさら、

▲無邪氣なる幼児の天真爛漫なるこそ愛らしけれ一角分別盛りの男女の、他人の感情、思はくの如何をも願みず、ひたすら、己が思ふまゝをいひ、感ずるまゝに振舞うて、人は兎角、包み隠しなき天真爛漫こそよけれなどいふ、いみじく悪し。世には、眞實さらぬも、ことさらにかく装ふ人ありこは非事なり、とかくは磊落を装ふ人ほど、俗の

結晶體と知るべし。又、眞實、天真爛漫らしき人もあり、ある文士は、かゝる人こそ、感情の訓練せられざる、憐れむべき人なりといへり、げにやかゝる人のみ、ならましかば、世はとこしへに争のみならまし。禮儀とは、或度までは、己が感情を包みかくすに在りと知らずや

▲可笑しきは、三歳四歳が程、外つ國に留學して歸朝りませる人の、始めて、日本に來り給ひけん人の風したることにぞある、さるはいみじくハイカレル新歸朝者の「左様、確か神田の錦町とかいふ町に云々」と語らるゝを聞き、覺えずもうちほゝえまれてかくなん。

○フレーベル會俳句端書集

一、課題 夏季雜吟一人十句以下